九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

御伽草子の表記体系(一)

崎村，弘文
鹿児島大学講師

https://doi.org/10.15017/10516

出版情報：文獻探究. 9, pp.46-59, 1981-12-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

御尋ねに。

崎村弘文

本誌9号所載の拙稿「御伽草子の表記体系（一）」については、その後、多くの御意見御教示を賜わり、大変有り難く存じました。この場を借りて、篤く御礼申し上げます。

続稿は、本年後半刊の本誌12号に掲載してもらう予定ですが、その前に、前稿に対する若干の補訂を行ない、御参考に供したいと思います。校正ミスがいくつか見つかったほか、数名の方より、〈研究の意図をいま少し明らかにせよ〉との御要望を賜わったからです。

まず、校正ミスについてですが、左記の如く補訂を加えたいと思います。

頁・段・行	補訂事項
48上3	そうきようろく→そうきやうろく
〃下2	（朝庭）→（朝廷）
50下8	～しやう（城）12下→……14下
50下13	※左記を補なう。
	しやうらふ（上臈）1下　しゆしやう（衆生）1下　たんしやう（誕生）1
51上12	そう（僧）1下→-4行目、せつほう（説法）5下の次へ移す。
52上14	つかうまつる1→つかうまつる1
53下12	（禅司・or前司？）→……11
54下13	（尸上）→（殿上）
59上1	×けとろかす→×をとろかす

このほか、いくつかの意味不明の語『熊野の本地』ほの〈ひたとくわう〉〈はんとう〉等々を一覧表に示しておりませんが、これらについては、論稿の完結時に、まとまったかたちで考察を付した上、提示したいと思っております（そのほとんどは、草子の作者もしくは筆者の作為・誤認に基づくでたらめな語形と思われます）。

次に、研究の意図についてですが、詳しく述べれば左記のようになります。

即ち、第一には、やはり、御伽草子を資料として当時の仮名表記の一般的傾向を明らかにすること、これを目標にしております。

当時の仮名表記のあり方については、従来、仮名遣い書を中心に論じられて来ましたが、当時書写された文献の表記を分析してみると、その実態は必ずしも仮名遣い書の記述と一致せず、むしろ、そうした規範に無頓着とさえ見える実態を持つものが少なくありません。どうやら、その背景には、〈定家以後の仮名遣〉に種々の異伝が見られたことのほかに、「仮名遣いを問題にしたのが、堂上の歌人・連歌師といったかなり限られた範囲の人々であり、他の多くの人々は、より表音性の高い実用的な表記に依っていた」という事実が有るものようです。

御伽草子の表記は、製作年代・作品内容等により実に多様な様相を呈しておりますが、全般に表音性の高い性格を持ち、当時

一般に行なわれていた表記のあり方を知る上で、重要な手がかりを提供するものと思われます。

第二には、右の研究の成果を御伽草子そのものの研究に活用したいと考えております。

周知の如く、御伽草子は、奥書き等を持たないのが通例であることや、中世から近世まで製作様式に大きな変化を来さぬまま作り続けられたこと等から、書誌学的・美術史的に製作年代を判定することの困難なものとして、問題とされて来ました。

しかし、或る程度新古の関係を判断し得るものについて、表記実態を国語学的に検討してみると、ハ行転呼音の表記等一部の事象については製作年代の推移に見合う明らかな相違が認められ、「慎重に研究を進めれば、これを製作年代判定のカギとなし得る」との期待が持たれます。

御尋ねの方々は、この辺りを明確にせよと示唆して下さったものと存じます。

他にもいくつか、副次的な目標とするところが有りますが、それについては、おいおい、論考を進める中で触れて行きたいと思っております。御叱正のほど、お願い申し上げます。

（なお、これ以外に、〈あのような一覧表を掲げるのは何故か？〉といった御尋ねも頂きましたが、それは、「擬似自然科学的性格を持つ国語学のことゆえ、自然科学と同様に追試を容易ならしめる道を開いておいても良い」と考えるからで、他意は有りません。）

簿　名　会　員

一子　洋一　倉橋原島田藤村田橋坂山原田田井本野　飯大柏辛久後崎園高田（伊佐・田中）中　楠花福松矢

合百　卓雄　正啓康弘豊敬憲潤豊良俊迪常準

絵一　望郎暢雅至夫一明子玲里廣夫憲道浩

美順子子子　良正倫順瓊萬義富二雅正

部川野村部生口石瀬山坂村口田田月県

安稲小上木國坂白高高田張中野花古望山